

俳句雑誌



20周年記念号

空

令和4年10月29日発行

第20巻1号

通巻第103号



2022・10

**SORA** 103号



\* 私の二句 \*



主宰・同人 I

与するも佳し天辺の鷹になら  
 母と一歩支へて数歩鳥帰る  
 袋角触れてはならぬ色をして  
 父ははのなき世は長し金玉糖

福岡柴田佐知子  
 福岡高倉和子

名曲と同じ苗札ハミングす  
 吊し鮭框に映り名刺置く

東京中田みなみ

白鍵に黒鍵の影凍返る  
 永遠でなきゆゑ励むヒヤシンス  
 鶴守りの便り一片鶴来しと  
 縁側のおとぎ噺に小鳥来る

長崎荒井千佐代  
 福岡柴田志津子

光量の足らぬ夢なり冬堇  
 太箸やひかりの中の一家族  
 鷹渡り終へ海鳴の街残る

埼玉服部早苗  
 北九州深川淑枝

あたたかや埴輪の家も窓を持ち  
 みづうみは空と向き合ひ去年今年  
 海を呑み海を噴き出す鯨かな  
 伏兵のごとく現れ野火放つ  
 迎へ火を放ちて野火を迎へ撃つ

広島戸栗末廣  
 福岡角野良生





同人Ⅱ・会員（掲載順 ア行より）

去来忌や水音近き茶花摘む

粕屋あき千春

子も入れてさくらさくらの水鏡

眠る児も囁んでゆきたる獅子頭

福岡あさなが捷

ハミングではがしゆきたる春キャベツ

子の電話母の日だからとだけ言ひて

兵庫青木朋子

桔梗のつぼみの中の呼吸かな

一人づつ紙抜け出でし雛かな

福岡秋津令

落とし湯に巻かれてゆきぬ秋の蠅

愛ほしむ間もなく流す紙雛

直方石橋幾代

落椿大きな水輪ひるげけり

山頂でひらく歳時記春の雲

大阪井上和子

針もたぬ母の晩年秋日和

微笑に返すウイנק風光る

東京今井康子

原つばは少年のもの夏空も

花鋏鳴らしたるのみ成木責

兵庫岩井京子

ロボットも盆休みらし首折りて

つま先でこらふる言葉鴟の声

兵庫えとう樹里

手相なら死んでゐるころ亀鳴けり

触れられし指手袋にしまひけり

兵庫大西乃子

奥山の枯木は真夜に歩き出す

いくつかはまだ息づける落椿

兵庫岡村尚子

家並の灯り見てゐる湯ざめかな

過去よりも短き未来花は葉に

北海道押田裕見子

失ひし歯の数いくつ目借時

白日傘明日香歩くは恋に似て

北九州河原敬子

狐火や埴輪の笑みは土中でも





まつ白な雲と交信葱坊主

神奈川 窪みち子

昼寝子の絵本を風がめくりをり

宝船撃沈さるることもなし

福岡 栗原京子

青空に腕の波や玉せせり

初冬の夕日さしくなるばかり

北九州 兒玉充代

指笛のかるさ犬呼ぶ春の土手

木に登り天下を取りし日焼の子

糸島 小林朱夏

灘風に天地失ふ鯉幟

寒鴉鳴きに來てゐるだけの潟

北九州 坂口学

走り根の峽にせり出す蝉時雨

春深し畳みて捨つる父の服

直方 曾根富久恵

空蝉がそよぐ一葉を羽交締め

爪を切る玉葱を剥く爪残し

須恵 苑実耶

白髪染め止めれば自在鳥の恋

一匹は漢の美称梅白し

大阪 田岡千章

夜の蝉いつか仙ふと捨てぬもの

万緑へ真白き神馬引き出さる

岡垣 田中とし江

光ごと鋤きて菜の花畑かな

組分けは花の名前で入園す

東京 遠山のり子

揺れやまぬ木々の枝先春いまだ

桜葉降る迷惑なほど愛す

長崎 仲里奈央

母の日の手紙に混じる鏡文字

新涼や木地師木の香のまん中に

福岡 永淵恵子

涅槃図の畳へ赤子降ろしけり

山なみを照らし出したる冬満月

大宰府 西住三恵子

玄海の沖のふくらむ霧笛かな

絹団扇納め白寿の柩閉づ

兵庫 林徹也

心底の懺悔ためらふ遠花火





闇汁に招きて婚の橋渡し

千葉原 友子

地下足袋も大根も洗ふ束子かな

紙の上の砂鉄のをどる春隣

福岡 樋口みのぶ

兄いつも先を歩めり墓参り

沖荒れて隠岐に仮寝や虎落笛

広島 星加鷹彦

菜の花の黄と黄が擦れ黄をこぼす

七日はや鱈の開きのひんがら目

長崎 松尾龍之介

あららあれれと束の間を笹落葉

田仕舞の煙が包む一揆の碑

熊本 松田明子

生き生きと人が斬りあふ村芝居

蟹走る山裾どこも濡れてぬし

春日 三井所美智子

かなかなや蔵に正しく鍬や鎌

春隣生くる手立ての血を貰ふ

糸田 宮井知英

善女など真つ平御免萩くくる

寒月や台車ばかりの貨車過ぐる

大野城 森田明成

草の花我に過ぎたる友ばかり

水平は夢見るところ浮寝鳥

大宰府 山本則男

眼玉より歩き出したる羽抜鶏

しばらくは椿でぬたき落椿

東京 山田正子

ドア止めに西瓜転がす勝手口

母にまだ握る力や春の月

北九州 横田敬子

ビル街にわが青春や鳥の恋

母泣けば吾も泣きたし蓼の花

直方 吉田悦子

静かなる水は暗渠へ星まつり

つばくらめ軒くぐるとき力抜く

粕屋 吉田 菫

仕返しは兄がしてやる草の絮

農夫より二の腕太き案山子かな

兵庫 青木和男

真青な空より凧を巻き戻す





蓮の花傷つくほどの雨となる

東京 石井みゆき

気乗りせぬ猫へしつこく猫じやらし

戻りてはすぐに飛び出す親つばめ

直方 岩下きぬ代

誰よりも声の大きな生身魂

花ふぶき母と歩きし日のやうに

北九州 大谷 政光

馬の背の上に山なみ秋の風

冬むくし叩き比ぶる古木魚

福岡 神田たみ子

初山河大きな景の句を詠まむ

修験道の峯や夏雲競ひ立つ

糸田 倉智万数雄

変りなき日々を重ねて秋簾

暖房車太腿あたりから眠気

春日 古賀 真理

蒼き墓場トラック島の冬の月

転ぶ子の横を一気に運動会

福岡 後藤 園子

みどりの日お掃除ロボの名はよいこ

水脈に乗り光広がる良夜かな

兵庫 佐藤 和弘

飛行機の航路の上の天高し

初恋の人も老人賀状来る

福岡 白水 良子

子の墓や仕ふるやうに竜の玉

その後は空に委ねむ種選び

糸田 杉本みどり

元日に生まれし子にもお年玉

そのページ鼠とチーズ冬の星

兵庫 高畑 桂

大丸の中を突つ切り梅雨に入る

廃船の竜骨晒す酷暑かな

北九州 高島 浩一

踏切の鐘に追はれし稲雀

秋光や鹿は黄金に東大寺

千葉 田中 素直

春の月顔の幅だけ雨戸開け

ペーロンの舳先が上がる一番艇

久留米 附出 勇人

春風やりボン結びしプロゴルフアー







紋白蝶 碍子の空を漂へる

兵庫 中村 瑞枝

げんげ田や鬼につかまる声たかく

きんぼうげ無垢な心の短くて

福岡 荷宮 克代

創世紀の大地もかくや野火走る

暖かやすぐに腹ばふ絵本の子

広島 野中 みのり

向日葵の人間臭く枯れにけり

新海苔をつまみに酒と友のゐて

福岡 畑 由子

文旦の黄は太陽の欠片かな

温度差にたぢろぐ廊下熱帯夜

東京 林 れい

風薫る何も要らない森の朝

山門を潜れば浄土萩白し

糸田 日高 孝

秋晴や飛行機慕ふ雲の筋

林檎届く志賀高原の蟻つけて

東京 本多 トミ

夕焼けを河に残して画架たたむ

花吹雪朝日は昇り君子は死す

直方 牧 康子

聖女にも闇はあるらむ虎落笛

蘂や電車ごつこが生業に

長崎 松尾 康代

秋の蚊や全集歪む古本屋

春の夢亡き父もゐて皆若し

豊前 むつみ 蓮

雪もよひ軍手つらぬく薔薇の棘

間歓泉一分のショール春の溪

東京 村上 二三

源流に梅花藻の花揺れ止まず

螢や浮舞台へと狂言師

直方 本松 陽子

雨の粒つけて濃くなる桃の花

病院で食ぶる赤飯文化の日

福岡 矢野 綾子

寝転べば足のはみ出す春炬燵

座敷まで拘杞を煎ずる匂ひかな

田川 吉田 容子

雨けむる軒にからまる烏瓜



・ 第十一回 「空賞」 受賞作品 ・

転がる雀 坂口 学



喧嘩風真つ青な空奪ひ合ふ

土筆摘むお百度を踏む母を待ち

丸太橋わたれば祠鳥の恋

洲に寄する流木白し仏生会

棒のごと伸びて山鳥疾走す

草おぼろ湖底へつづく馬の径

八十八夜誰も通らぬ沈み橋

鶺鴒鳴くや杣の厨の灯るころ

螢を何処へもやらぬ杉襖

麦秋や三和土の隅の一升瓶

柿たわわ何にほほゑむ野の仏

なだれ来て雀転がる刈田かな

荒草に解きし稲架棒寝かせけり

鳥羽搏つのに飛びたつ草の絮

故郷や垂直に立つ糶煙

糶殻焼く地函めく焦げ目広げつつ

木道は沢音ばかり夕紅葉

山裾は芒の風となりにけり

呼べば来る肥後の赤牛鬮雲

風切羽の縞鮮やかに鷹渡る

山かげに残つてみたる霜の花

冬晴やバケツからんと釣瓶井戸

寒雀黒き礫となりて去る

連山は大蛇のごとし寒北斗

むささびや一人となりし露天風呂

山姥と梟の里日暮来る





・第十一回「空新人賞」受賞作品・

大西 乃子



草いろの粥ふき上がる初霞

家出半日ぶらんこにゆられけり

白梅やたたみて返す車椅子

迷ひ子のやうに一人の花見かな

田へ奔る八十八夜の水の音

母の日の男そはそはしてゐたる

自転車の籠の筍小躍りす

近道も抜け道も知り祭の子

うぶすなの海へ突つ込む荒神輿

蛇の衣この皮きつと若い蛇

短夜の屍の夫に添ひゐたり

根無草月を隠してしまひけり

紫蘇もんで母に近づく思ひあり

夕立の来さうな草の匂ひかな

釣忍母の高さに合はせけり

恋知らず泳ぎを知らず父知らず

金魚ひらひらそれだけでうれしくて

夕虹や一本残る母の帯

逢ひたくて丸ごとかじる青林檎

八月や紅蓮の空を知つてゐる

